

散歩の収穫



作家の赤瀬川源平さんは本を書いているより、写真を撮っている方が好きなような人で、本の中にも写真がよく出てくる 写真集も沢山ある
赤瀬川さんの写真集の1冊から題名を借りて出来たのが「散歩の収穫」で
これは私の散歩の記録でもある
毎日の散歩をカメラを提げて歩くと、歩くのが楽しくなる、なのについ面倒で
手ぶらで出かけ、しまったカメラを持ってくればよかったと後悔することもあり
その時の逃がした魚は大きい
散歩のほかウォーキング会では私の写真好きが誰も知る処となっている

村 田 恭 三
2012.4.23



チャルメラの音

夜空にチャルメラの音が聞こえそうだ
屋台だけが淋しく主人を待っていた
あの味は忘れられない懐かしい味だった



ブタもお散歩

犬の散歩仲間たちは楽しそうに話していた
そこに、このものが現れた
さすがに、犬の散歩者たちは寄りがたく
堂々の登場であった



老いたる床屋さん

昔ながらの床屋さん、よほど悪かったのであろうか
急いで書いた貼紙は、手も震えていそうに見えた
床屋さんも貼紙も哀しそうに思えた



くるくる、車やさん

自転車は今やエコの代表格、足でこいで
自前エネルギー
しかし、駅前や路上では、邪魔物でもある
これは自転車のせいではない



暖かい壁

この壁を見ていると、なにか心まで暖かく感じられる
優しさすら覚えてきた
大阪のど真中、谷町に存在して衰れに残っていた
これも、まもなく消える運命にはあった



どくろ仮面

よくよく見ると、ふと昔の映画を思い出した、どくろ仮面などという悪者が出ていたように思う
古いタイヤホールも、こうして見るとどくろ仮面に見えてきた



花は人を癒す

花好きな人に悪い人はいないが
 道徳をわきまえない人はいる
 こよなく花を愛する人は道徳もわきまえて
 いる





捨て猫はダメ

ペットの流行りとともに捨て猫も増えている
餌まで与えにくる人がいる
捨てられた猫も生きて行くのに必死で、どこにでも
餌をあさりにくる



子だくさん

雨上がり、お母さんは洗濯物で忙しそう
子供たちは遊びで、その辺りに見当たらない
主人を失った三輪車だけが淋しそうにしている



婦、は死語になっている

ここの看護婦さんは家庭内療養をお世話する人だった

家政婦さんはお手伝いさん、古い小説の中にしか存在しなくなった

したがって、この商売も姿を消しているの
であろう



空のスクランブル

頭の上も渋滞、どれが何の配線かすら
分からない
電灯線と電話線の時代は渋滞もなかった
空にも通行整理がいきそうだ



安心通学路

道路下の地下路、最近は児童も登校時、下校時には老人会などで「愛ガード」として辻、辻で見張り番で守られている

この地下路も両壁に壁画も書かれ、行く人を楽しませる 通るのは児童だけではない、知る人ぞ知る道



エコ住宅

昔から、この様な家はたくさんあったが、今は見ることも少なくなった
夏場になると自然と青葉が茂ってくる
エコ環境で流行り出したが、現在は野菜を植えて
日を遮り、収穫にもありつく、一石二鳥

無用の長物

黄昏どき、エントツから煙のみえることは
ない、そばに寄ると異様に大きい
町のどこにでもあつた、お風呂屋さん
大方は姿を消したが、後に残ったものは
無用の長物か





ぼくらの遠足

公園では、園児の元気な声が聞こえる
そばには、お行儀よくリックが並んでいる
自分たちの陣とりなのだろうか
この中には入れないような気持ちになる



これなあに～

蛸壺です、知多半島の最南端、日間賀島は蛸で有名、民宿では蛸をはじめ、伊勢えび、ふぐまで魚ずくし
島をあげて、蛸で歓迎、小さな島が蛸島になっている



蛸で歓迎

船を下りれば、蛸が出迎えてくれる
蛸壺の中から蛸が出てる、どこの店もたこ
せんべいに蛸まんじゅう
そして、蛸土産を買って帰ることになる



スクランブル道

ここは、旧奈良街道、東高野街道の交わるみち
いまでは何でもない、生活道だが旧街道のなごりは
残っている
ところどころに目につく、石標はいまでは誰も気がつく
人もいない



旧街道のお地藏さん

先の作品の横に古くからあるお地藏さん、前に見える生駒山を登れが暗峠はもうすぐ
奈良街道は続いて伊勢街道になりお伊勢さん参りはこの道を行くことになる
今でも行事で玉造から伊勢参りは有名になっている

ころのお昼寝

人に、猫型人間と犬型人間がいるようだが、どちらかと言えば、猫型が善さそうだが自由に動けて、好きに生動ける
繋がれた犬は可愛そうな気がする
番犬にもならない犬もそんなこと知らない





梅と車の競いあい

ある、高級宅に素敵な車が並んでいる
そこに咲いた、早春の梅、これは競い合っている
としか思えない
車が一層光ってみえる、梅も冴えている



旧家の玄関

踏み板はいかにも古い、履物が面白い
可愛い草履と古いスリッパ、この取り合
せをどう、考えたらいいのかなあ



裏 庭

光景は裏庭に味がある、路地の横を裏に
廻ってみた
荒れた、物置のような、そしてなんとも言え
ない懐かしい思いでの場所



散歩の収穫

朝の散歩は思わぬ収穫がある
近頃は、ゴウヤにきゅうりが多く、朝顔を
みる機会も少なくなった
朝顔をみると、ほっとする



旧街道は現在も街道

熊野古道歩きが大流行り、どこから、どこまでが熊野
街道なのかも知らない
大阪市内のど真中を通っていたことは間違いない
ところどころでこの石標はよくみる
大阪市が整備して立てたのだろう

くぐり長屋

近代住宅で取り残された一角、今でも
谷町にはこの様な住宅が残っている
昔懐かしい風景である、以前はくぐりの前
に10軒ほどの表札が並んでいた
これが、いつまで残るか、残ってほしい





まだ住めます

いまでも崩れそうなこの家も立派に住めてます
花園ラグビー場の北、旧奈良街道の、松原の宿
ところ、どころに古い家が見える、人影は見えないが
季節の花も下げられている、人の匂いはただよって
くるようだ



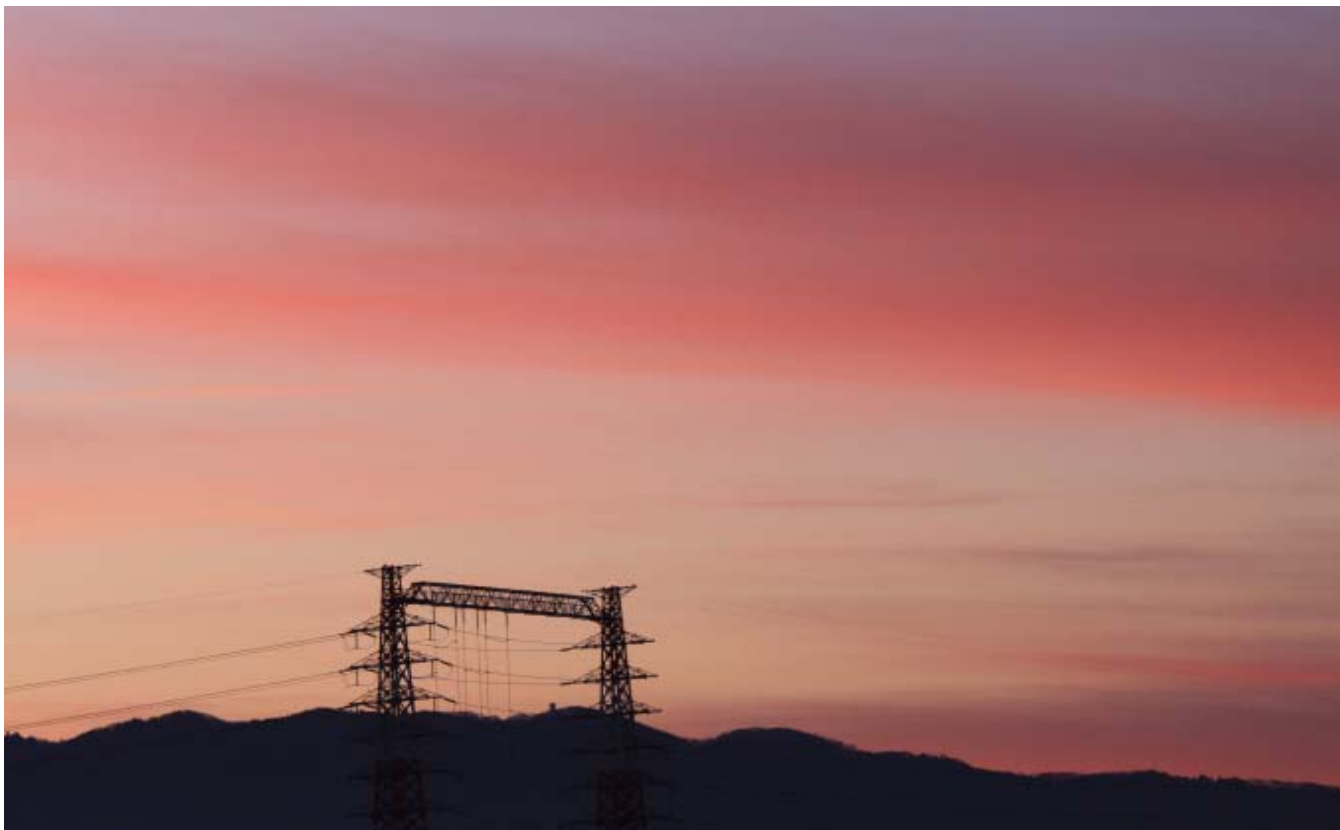
水呑地藏道

途中、水呑地藏さんのある十三峠道は、大阪から奈良大和への旧道であり、今もハイカーで賑わう花の里、神立の外れ、神立茶屋辻、ここから山道に入っていく
道中いたるところで、お地藏さんが迎えてくれる



路地裏

昔、この辺りを闇市場と呼んでいた、いまではきれいな店がならび、朝賑わう
朝の早い商売で、夕方ともなればシャッターが下りる
店終いも早い



生駒山の朝やけ

夜明けベランダから東を向けばときとして、色鮮やかな空がみえる
これは、散歩もいない、早朝のカメラのシャッター音だけがひびく



黄昏ときの夕日落ち

これもまた、楽な撮影でベランダの西をみれば、夕日
が落ちる、ただカメラを向けただけ
感動がまったくないとは思わない、黄昏というものは
いつも、人生と合わせた感情がでる



花のある路地

路地歩きがすきだ 路地には生活感が一杯だ
行きかう人も、いつものおなじみさんであろう
若いころ横町と言って、このような横丁はどこにでも
あった
横丁には人情と風情がある



凱旋門か砦か

ラグビー場前の石の塔、見た目は小さいが写真では大きく見える
夏の光が差し込んでいる、これはやはり砦に見える
砦には兵士はいない、賑やかな子供たちの叫び声だけが、聞こえてくる

長尾の瀧道

生駒山麓、生駒に登るハイカー道でもあり
行者道でもある 初夏の大祭には多くの
行者さんが、訪れる
坂道を登りながら、えんやらさ、飾られた
お地蔵さんが出迎えてくれる





お地蔵さんの団体

お地蔵さんといえば、一体のものを想像するが
これ程並べられたら圧倒する、いったい何体あったか
不信心にも、どこのお寺か覚えていない、おそらく
情景から想像すれば、水子地蔵さんのように思う
みな、安らかな顔に見えた



おひさま

夏といえばひまわり、ひまわりといえば、おひさまを
を思う
暑い夏でもおひさまを、うらむことはできない、おひさ
こそ生命のみなもとなのだ



空中散歩

近頃ではロープウエーはどこにでも出来ている
神戸布引山から、市街地の三の宮近くまで、平日にはほとんどがカラで動いている
一人で乗ったら、さぞかし爽快だろう



恐竜だ

子供たちはいつも、恐竜、怪獣が好きなようだ
イベント会場でも、怖いよ～
不用品で作った恐竜がいまにも襲ってきそうだ
大人でも楽しめそうに、よくできていた



残 骸

大雨後の川辺だった、どこから来たのかゴミの山
無駄とゴミはすぐたまる
震災あとの残骸を思いうかべた これも処理が必要
なのか、それとも、次の雨で又流されるのか
人の出すゴミ、それを人がみてうんざりする



これ、な～に

最近あまり見なくなった麦だ、稲と同じように干す
このあと、脱穀するのか、この辺りでは麦自身をほと
んど見かけない
麦と稲、麦は粉にしなくてはならない
どうも、子供の頃はよく植えていた、麦の事を忘れて
いる



軒下の風景

玉ねぎは干すと日持ちもいいし、保存食になる
農家で、採れた玉ねぎを干している光景はよくみた
ただ、ここで干しているのは、半端な量で、家庭菜園
であろう
食品も「干す」ということが重要な要素にである



花 一 輪

ここは、一輪がよく似合う 写真の効果は必要な所
だけ切り取れる
世の中無駄な物が多すぎる、無駄の中から必要な
物を取りだすことは、人生そのものかも知れない
その人生を無駄にしていることもある



彼 岸 花

彼岸花はなにも畔に咲いているものだけが花ではない
この花、家の軒下でちょうちんに書かれていた、見事に咲いている



パパとの日曜日

最近のパパは大胆だ どれだけ、いかつい人かと
顔を見たら、穏やかなお父さんだった
これもフアッションと見れば、我々にはまねができな
い、世の中目立つものが勝ちか
それでも、子供を見守る目は優しい



双子ちゃん

昔なら珍しいと言われた、双子ちゃんをよくみる
以前なら、同じものを着せて、同じように育てたもの
だが最近は違っている
着る物も別、個性も違うように、伸ばしている
将来はどうなるのであろうか

神も混乱

とかく混乱の世の中、人々は先の明かりを見出すのに混乱している
神もまた、導きに混乱しているのであろうか
愛で人は救ってもらえるのであろうか
神も混乱の時代の様に思えた





街中の大明神

明神さん、古くからこの地にある、街は後で出来ている、明神さんが動くことはない
今では町の守り神、掃除も管理も行きとどいていた



静かな工場

東大阪は小さな工場長屋が並ぶ町であるが、この工場は古い一軒屋だ
人影はない、廃業かと思ったが、人の匂いはする
ほそぼそと何かを作っているのであろう



廃 車

自動車でも捨てる世の中、自転車を捨てることなど
さほど珍しくもない
それにしても、随分不安定なところに捨てたものだ
よく見れば、前のタイヤだけ盗られていた



猫の目

猫の目はいつも光っているが、昼間こんなにあおく
光るとは、始めて見た
どうやら、これは付近が草中で、草の色が目映つ
ているのか、もともと猫の目はあおいのか
猫の目はガラス玉のようで赤いところにいれば赤く
映るのだろう



群 亀

川で鯉が群れていることがあるが、亀でもこんなに群れる
人間もおなじ、群れていることが安心なのだろう
それとも美味しい餌でもあさっているのかもしれない
動物の習性、群れの中にいれば、安心ではある



かや舎

蚊帳と書いて「かや」と読む、昔懐かしい蚊帳を思い
だした 奈良町によくこの看板を見かける
かや自身、昔子供の頃田舎で使って時以来見ても
いない 資料館に展示していたのであろうか
観損じてしまった



自然幾何学

田んぼの休田あと、ハスの枯れ枝もちらっと見える
午後の日を浴びていた、土の割れ目が印象的だった
これを芸術的とも思わないが、芸術ポイ感じはした
荒れ地のなか、光が当たり幾何学的にはみえた

生命力

石垣の割れ目から彼岸花が顔を出している
彼岸花もそうだが、球根類はどこからでも、顔をだす
植物の生命力には驚く





非有権者

選挙真盛り、候補者は将来の有権者に
訴えているのか
子供たちにはおもしろい看板だろう
それにしても、市議会議員の多いこと



あぜ道の出迎え

あすかの秋は賑やかだ 彼岸花のころ、いろんな
案山子人形が迎えてくれる
来る人を楽しませ、思わず立ち止まる
これは、スズメを追うためではなく人を呼ぶため



秋空の小道

どんな花を見ても心はなごむ、花にはそれだけ人を
引き付ける魅力がある
花を見れば、思わずカメラを向けてしまう
育てる人、それを見る人、それを撮るものもいる



休日の憩い

近頃は家でラッパでも吹いていたら、騒音で迷惑
がられる
思いきって吹ける場所を見つけるのも至難の業
広い緑地帯の一画、人影も少なく最高の練習場



ローカル秋祭り

おらが町の秋祭り、だんじり引いてちょっと一服
飲み物の用意もできています、御馳走もそろって
います
このだんじり、いつ出るのかと思っていたら、休憩も
出発も素早やかった



秋風ふく

さほど整備もされていそうもない場所でも時が来れば
コスモスが咲きほこる
秋の風に花は揺れ動く ひ弱はそうな枝がいまにも
倒れそうになる
ひと時の憩いの場所にきょうも人々は集まる



みつめあい

人の集まるところには、ペットもくる 人が楽しめば犬
もよろこぶ
あいにくの雨あがり、人も犬も足下を汚していた



京の思い出

友人達と京都散策、東山を歩いて、歩いて銀閣寺に
たどり着いた 紅葉には早かったが、しゃべっている
うちに、ここまで来た
時間も距離間の考えなければ、どこまでも歩ける



宝の山

邪魔ものにあらず、いまや古い電化製品は宝庫の塊
道端に積み上げているのも貴重品
横には冷蔵庫も積んでいた そういえば回収業者の
増えたこと
古いテレビ、クーラー、アンプ、パソコンの回収に～



秋の園

花のあるところに人が集まる 近くの緑地帯では
コスモスが終わりに近づいている
世話のおじさん、みなに持ち帰らせている、このまま
しおれさせてしまうより、持って帰って家で生ければ
花も本望だろう



残り柿

この光景で興味をひかれたのは、屋根の横の「水」の字だった 八尾神立の古い民家の残る地区、水の字は火事除けだろうか、それとも何にか言われがあるのか 残り柿がいまにも落ちそうで そこにふと、情緒を感じた



豆ラガー

東大阪はラグビーのまち、花園ラグビー場には休日
豆ラガーたちが集まる
先輩のラグーマンが、指導するのだ
子供たちの動きより、そばから見ている親たちの
声が大きく響いている



ちょっと一休み

犬を飼えば散歩は欠かせない、わたしが飼おうと
いったのだから、散歩はわたしの役目
ちょっと休憩させて、ボクは早く行きたい
お友達もはやくいこうよ～



胸つき八丁

枚岡j展望台から、生駒神津嶽コース、らくらく出会い
からひと登り、距離は短いが高低差は厳しい。
胸つき八丁、ここを過ぎれば休憩小屋、ぶくらの広場
までは後一息
ぶくらの広場では展望が開けている



ヒロイン

NHK大阪放送局は隣の歴史観とともに立派な建物だ
 ちょっと覗いてみた 興味がないので、見学はしてい
 ない NHKの1階にドラマの案内、朝のカーネーション
 と日曜夜の、江姫たちの戦国、観ているので気を引
 いた

キノコ

木の切り株に、今朝でたばかりのような
鮮やかなキノコが観えた
腐った木のはしからも、土の上からも
どんどんキノコはでる 培養殺菌でどこに
でも芽をだす





雨の日も楽しい

大人には憂鬱な雨も、子供には楽しい日だ
カッパを着せられ、傘を持たされ、どこにでも行きます
怖くはない
お母さんは立ち話、これもまた楽しいひと時



ゴミとちがいます

これは、ゴミ袋ではありません ボクです
雨の日にビニールをかぶされ、これで何処にでもOK
動き回っていた、そうでないとゴミ箱に捨てられそう
だ 面白い光景をみた



丹精のお披露目

菊人形が盛んなときがあった、菊師がいなくなって
それも少なくなった
それでも、菊作りの好きな人は多い そんな人は毎
年、丹精込めて菊をつくる
そのお披露目は道ゆく人を楽しませる



趣味も本格

ここまでくると、趣味か商売かわからない それでも
値段など付いていない
ただ道ゆく人が、あぜんと見惚れているだけ
観てもらって菊も本望、これが毎年だからお見事と
言うしかない



家族揃って

お爺ちゃんも、お婆ちゃんも家族揃って
七五三参り、全員揃いました
お父さんが見えない様だが、これはカメラ
マンだろう
秋晴れの1日、さあこれからどこにいくの～



暗峠道

「菊の香に、くらがり越える、節句かな」枚岡神社より
暗がり道の登り口に、芭蕉の句碑がある
芭蕉も秋、この道を通って奈良大和にでたのである
旧伊勢街道、細い道がいまは国道、暗峠にでる



古いお店

このポスターを見て、店の歴史を感じる
スーパードライなどなかった時代です、ポスターの
女性の服装から想像すると、50年ぐらい前だろうか
懐かしいものを見た

ふけゆく秋

壁についた葉1枚、この葉のそばへ毛虫
がゆっくりと登ってゆく
季節外れの虫に目が向いた
落ち葉と毛虫、なにかを感じさせた





師走近づく

なぜ、これに引かれたかと言うと、40数年前、自分も印刷屋で仕事をしていたことがある。年賀状の印刷もしていた、懐かしいが、今時この注文に来る人がいるのだろうか、町の印刷屋さんの姿も消えている。誰でも家で出来る時代になった。



すぎゆくとき

なにげない光景に、ふと、立ち止まった 道ゆく人も
足早に感じた
忘れられたように自転車も寂しそうで、ふけゆく秋が
過ぎてゆく
写真では、その過ぎ去る秋を表現できた感じがした



落葉に埋もれて

前作と同じような光景になった
しかし、感じ方は違った この影には秋満喫のようで
秋を謳歌しているように見えた
桜紅葉が降るように落ち、積っている
この桜並木の落ち葉の山は、どこにゆくのだろうか



寂しいベンチ

人のいない秋はどこも寂しい、このベンチも子供たち
で賑わった、お年寄りも語らった
その余韻すらも感じない ついこのあいだのことだ
いまは、静かな、しずかな場所になる



干 し 柿

我が家でも干柿が好きで、干し柿をつるす年もある
その年はかならず、地方から渋柿を沢山送ってもらっ
た年で、ベランダー1面に柿がならぶこともある
その時は寒く、からっ風が吹くことを願っていた

まねき上げ

歳末恒例「顔見世興行」年の瀬が近づくと
まねき看板が上がる
歌舞伎好きは、この芝居を観て新年を迎えることになるのだ
京都南座、前に立っても小じんまりとした
建物で、さぞかし役者も近くで観られること
であろう





もみじ

雨のあと、マンホールに、もみじが張り付いていた
道の中央、おもわず踏みそうになったが、除けて
歩いた
散り葉になるまで、しばしの輝き



ようこそ、紅葉狩りに

寺の幼稚園、見物人のおでむかえ、確かに12月3日
だった 毎日、日にちがいれかわるのだろう
観光客が多くて、幼稚園行事ができるのであろうか
自然観察には適していそうだ



葉 一 枚

葉一枚、静かにたれている、なにかに
からまっているのか、落ちない
白い糸が引いている、葉の上の白い物が
なんなのか興味がわく

ふるさとの風景

大阪の陣で有名な、真田山、三光神社の幸村像、ここは懐かしくも父の出生で、自分まで故郷のような気がしている
像の下には今でも、大阪城への抜け穴があるが、はたして抜けられたのか、定かではない





庶民の街

町の商店街がさびれるなか、JR & 近鉄駅の鶴橋は
庶民でいつも賑わっている
最近では観光、見学者まできている
小さな店が沢山並び、それぞれのかけ声も高い

駅高架下

駅下が庶民の街、この下は迷路の様に店屋が続く、かけ声も電車の音も一緒だ
食品エリア、衣料品エリア、トンネルの中にいるようで、どこに抜けるのか、始めての人は迷ってしまう





初詣

元日には枚岡神社に初詣することを習慣にしている
毎年運動を兼ねて歩いていく
家から45分位かかるが、かがり火で出迎えてくれる
午前中は参拝者も多くはない
清々しい気持ちで次の神社へ初詣のはしご



大 吉

神社では、おみくじを引きたくなる、ことしの運勢は
”大吉”か、中吉ぐらいで、気分は大吉
いたるところで、おみくじのはながさく
若い人にも、これには興味があるのだろう



一の鳥居しめ縄神事

正月3日は枚岡神社、一の鳥居のしめ縄神事、近所の皆さん勢揃い、お祓いをしてもらい、新しい新年の始まり、気持ちも新たに今年も善い年であります様にこのあと、新年会となるのかも



一 休 み

初詣、石切さんの参道道、急な坂道で老人は一休み
祝い幕も畔やかな店屋のまえでいっぶく
行きか帰りか、そこまでは見定めていなかった
一人でいた、ふと孤独そうにみえた



お稲荷さん

初詣参拝者の関西ベスト1の伏見お稲荷さんも少し
過ぎると平常にもどる
赤い鳥居をゆっくりとお山に登る 朝の光が輝いてい
た 歩きやすい石段がどこまでも続く



ハイカーもビックリ

いつも登っている山で雪の備えなどしていない
来てみてビックリ、靴もウォーキングシューズのみ
足下を気を付けながら、ゆっくりと登った
下山は困難、雪解けされている国道を下りることにした、久しい雪山だった



雪の日

大阪では珍しい雪が降った 平地では
積ったようでもなかったのに山に登ると
新雪で積っていた
雪は見慣れた風景も、新鮮に見える
上は暗峠、下は額田展望台





湯立て神事

節分祭の日、どここの神社でも行事がある
枚岡神社では、湯立て神事、大きい釜で
沸かしたお湯を、ささの前で巫女が降り舞
う、笹の一枝を家に持ち帰り、家内安全を
祈願する



廃 家

新築の家は匂いまで清々しいが、家もいずれは朽ち耐える それにしても、この惨めな姿は可愛そうだ
道路の奥でこの光景をさがした、見当てた我らが悪いのか、永年人の匂いがしていたのであろうに、その跡かたもない



生活の匂い

先の廃家の玄関、表札も痛々しい、これで永年の
住み家であったことがわかる
家も住まなくなったらただの、ごみと廃品の山
ここに住んでいた人はどこのいったのだろうか
家の歴史と人間の歴史を感じる



お笑い神事

神事はつねに儀式、神の仕業で、重々しいが、その神事もお笑い神事となると気分もほぐれる
いわゆる、笑っていればいいので、笑いが神事そのものである
宮司さんも巫女さんも氏子さんも、笑っていればよい



笑う門

人は笑っているときには、不幸を感じないはずだ
笑う門に福来たる、幸せを呼ぶのは笑いにある
天照大神さまも天岩戸から笑いで、出られたようだ
笑いは人をなごます



竹 送 り

二月堂、お松明のあの竹が京田辺から送られてくる
大きな竹が何本も列をなして運ばれる
古典行事にも最近では外国人の参加も多く見受ける
この竹が二月堂で、炎とかして舞いしれる

みんなで参加

古典行事も、関係者だけでは、
できません、ボクも私もみんな
で参加、重い竹をえんやらさ、
階段もなんのその、二月堂まで
運びます
古典行事参加の充実感





路傍のお地蔵さん

お地蔵さんは、いかにも優しそうだ、人間本来はこの
ような優しさがあるはずだ
人々はこの優しさを忘れているような世相になって、
世の中殺伐としている
お地蔵さんを見ていれば、ほっとする



暖 簾

お蕎麦屋さんには暖簾が似合う、それも路地奥で
古いほどいい、親父が手打ちそばを打つ、女将さん
がお茶をだす、客は常連、こんな光景が夢のなかに
あった
立ち食いそばなど、もってのほかだ



渡し船

今尚、大阪市内に渡船場があることを忘れていた
八百屋橋と言われる大阪でも、安治川、木津川には
橋を架けられず、今でも渡し船で対岸まで運んでいる
利用する人もなれたもので、これらの人の足になって
いる



梅ほころぶ

梅林の中でも、一枝を観るのが好きだ、梅は時期が長いので、1本の木でも早く咲く枝と、遅く咲く枝ができてくる
枝ぶりのいい、一枝を見つけようとするが、それでも環境がよくなかったり、探すのに苦労はする



大安吉日

枚岡神社の結婚式はオープンだ、拝観前の本殿でおこなわれる、そのため、拝観者にも祝福され、訪れる人もそのおめでたにあやかる



ここが一等場所

路傍に生えている草も春には花が咲く、踏まれても
踏まれても生えてくる草は強い
そして花も咲く、土のあるところに草は生えるそれが
たとえ、屋根横の瓦隅であっても立派な開花